

2022 年度ミニ観察会 ー少人数でじっくり観察しようー

初秋の見沼田んぼの自然観察

主催：NPO 法人自然観察大学 担当講師：平井一男、飯島和子

今回の観察会は、広大な見沼田んぼの一角にある見沼自然公園と、その近くの田んぼで実施しました。当初予定した日程（9/18）を、台風の影響で延期しての仕切り直しでした。都合で参加いただけなくなった方には申し訳ありませんが、雲一つない秋晴れの、最高の観察会日和でした。

見沼自然公園は、1994 年に開設された新しい公園です。“自然公園”と言いますが、人の手により快適に管理された都市公園のような雰囲気です。公園をはなれると、稲刈りを終えたばかりの、見沼田んぼらしい光景が広がります。

今回は昆虫を平井一男先生、植物を飯島和子先生に担当していただきました。

※ このレポートで掲載した写真は NPO 法人自然観察大学およびその関係者のものです。（禁無断転載）



今回の観察ルート。見沼自然公園を抜けて田んぼのエリアへ
地図は公園の掲示板を撮影したものです

● コナラの樹幹の昆虫

この大きなコナラの木を見てみましょう。
苔生した樹皮にいろいろな昆虫が観察できます。

＜カシノナガキクイムシ＞（コウチュウ目ナガキクイムシ科）

樹皮の所どころに木くずが出ています。

カシノナガキクイムシのしわざで、今話題の“ナラ枯れ”の原因となります。ここ埼玉では数年前から多発するようになりました。

→ コナラの老木の樹幹。木くず（フラス）が出ている





カシノナガキクイムシの排出した木くず



参考:カシノナガキクイムシ成虫

カシノナガキクイムシは成虫の体長が 5mm ほどと小さい虫です。木くず（フラス）は成虫が脱出するときに出したものだと思われます。

6 月ごろに幹の内部に侵入して産卵し、中で成長します。このとき木を食べるのではなく、坑道内で菌を繁殖させ、それを食べています。この菌はナラ菌などと言われ、増殖によって木の導管をふさいで枯死させます。これが今話題になっているナラ枯れで、老木ほど被害が大きくなるようです。カシノナガキクイムシは、コナラなどの落葉樹だけでなくマテバシイのような常緑樹も含めてブナ科の木を加害して枯らしてしまいます。

＜ヨコヅナサシガメ＞(カメムシ目サシガメ科)

ヨコヅナサシガメの幼虫が、樹幹を歩きまわっていました。外来種で、サシガメの仲間では日本で最大です。

幼虫で樹皮のくぼみなどに集まって越冬したのち、初夏に成虫になり、樹皮のすき間などに産卵します。

昆虫など捕らえて吸汁します。人間でも、触ると刺されることがあります。

＜モリチャバネゴキブリ＞(ゴキブリ目チャバネゴキブリ科)

根元の近くにはモリチャバネゴキブリが多数見られました。歩いたり飛んだり、活発に動いています。

落ち葉や枯葉、コケなどの中に住み、腐植を食べています。同属のチャバネゴキブリは室内の衛生害虫として知られていますね。



ヨコヅナサシガメ幼虫(カメムシ目サシガメ科)



モリチャバネゴキブリ成虫



● 外来種の手ゴロモ

Pochazia shantungensis

この日いちばん目についたのはこの手ゴロモです。イノコヅチ、コセンダングサなどの草本から、エノキ、コナラ、ノウゼンカズラなどの木本植物と、いたるところで観察できました。一週間前の下見ではたくさんの幼虫を観たのですが、この日はほとんどが成虫になっています。



Pochazia shantungensis 成虫。複眼がほんのり赤い

成虫は在来種のアミガサ手ゴロモに似ていますが、全身が黒く、複眼が赤く、前翅の縁の白い斑紋が縦長です。

幼虫はお尻から分泌したろう物質が縮れているので、在来種の手ゴロモとはずいぶん感じが違ってきます。



和名はまだないようで、学名では *Pochazia shantungensis* とされる手ゴロモの一種のようです（カメムシ目手ゴロモ科）。

2018 年頃から西日本で観察され、その後各地に広がったとされています。

観察中に、複眼が赤くて中国原産であることから“アカメカラ手ゴロモ（赤目唐羽衣）”という和名の候補が挙がりました。



同幼虫。ろう物質が縮れている。下はその後ろ姿

参考: 在来種の手ゴロモについては次をどうぞ
自然観察大学ブログ／夏の手ゴロモ
<https://sizenkan.exblog.jp/29296825/>

● 草地のチョウ

太陽が高くなって気温が上昇するとともにチョウが飛びはじめました。

すばやく飛んできたのはモンキチョウです。

ジャコウアゲハはフェンス際でウマノスズクサの芽生えに産卵をしているようです。

ツマグロヒョウモン、アカボシゴマダラ、テングチョウも飛んでいます。タテハチョウ科は成虫で越冬するものが多く、日中の温度が高くなる時に、秋の遅い時期まで活動を続けます。

飛ぶチョウを網で捕獲し、チョウを傷めないつかみ方、脚や翅はどのようにについているのかなど、観察のポイントを紹介いただきました。チョウは観察後にその場で放しています。



モンキチョウ雄(上)と雌(下)
シロチョウ科



ジャコウアゲハの産卵
アゲハチョウ科



ツマグロヒヨウモン雄(左)雌(右)
タテハチョウ科



アカボシゴマダラ タテハチョウ科



テングチョウ タテハチョウ科

● クイズ

えーと、突然ですがここでクイズです。
ここに標本箱を持ってきました。

Q1 この標本箱には、
何匹のチョウがいますか？

これはすぐにわかりますね。
数えたそのままの 8 匹です。

Q2 種類として見ると、
何種類のチョウでしょうか？

ヒントは雄と雌です。

正解はこのレポートの最後に記します。



● ひっつく実

秋にはひっつく実が目立ちます。

動物や人の衣類・くつなどにくっついて種子が運ばれる植物ですね。

くわしく見てみると、その仕組みやひっつく方法にはいくつかのパターンがあることがわかります。

<イノコヅチのなかま> (ヒユ科イノコヅチ属)

公園内のあちこちに、イノコヅチが見られます。以前はヒナタイノコヅチ、ヒカゲイノコヅチ、イノコヅチの 3 種に分けていましたが、現在はヒナタイノコヅチとイノコヅチ (別名ヒカゲイノコヅチ) の 2 種に分類されています。(YList による)

両者は生育地が分かれていて、名前のようにヒナタイノコヅチは日当たりのよい道ばたなどに多く、イノコヅチは林縁などに多く見られます。花序の感じも違ってきます。ヒナタイノコヅチは短く密に着きますが、イノコヅチは長くまばらにつきます。

花は横向きに咲きますが、果実は下向きになります。ルーペで見ると果実には先端の反り返ったとげがありますね。このとげは、花のときには苞葉だったものが果実のときまで残ったものです。これで動物や衣類などについて、種子散布されます。

<チヂミザサ> (イネ科チヂミザサ属)

チヂミザサの群落があります。

長い芒 (のぎ) が目立ちますね。



ヒナタイノコヅチは日なたに多く見られる



先端は花の時期で、その下は若い果実。果実は下向きになり、ひっつくためのとげがある



群生するチヂミザサと芒の粘液



さわるとこの部分がべたべたして、これで動物や人の衣類などにくっついて、種子を散布すると考えられます。

葉の縁は波打っているのが特徴で、それが名前のもとになったのだと思われます。

＜オオオナモミ＞（キク科オナモミ属）

道沿いの草むらに、大きな葉をつけたオオオナモミが見られます。

今はごく若い実と、そのすぐ上に雄花（雄花序）があります。

実にはびっしりととげがありますね。ルーペで見ると、とげの先はかぎ型に反り返って、一度くっつくとなかなか離れないようになっています。

この果実の中には 2 個の種子が入っていて、時期をずらして発芽するといわれています。



↑ 参考:オオオナモミの果実と断面
中には 2 個の種子

← オオオナモミの花序
上部に雄花序、下部に雌
花序がある

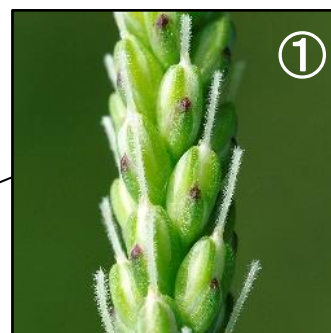
＜オオバコ＞

（オオバコ科オオバコ属）

花穂をつけたオオバコが多数見られます。草刈りや踏みつけによるためか、小さい個体が多いですね。

オオバコの花穂は開花しながら、上に伸びていきます。花は両性花で、穂の先端が最も新しい部分で雌しべの見える時期です①。その下が雄しべの時期②、その下は花が終わって実になった部分③です。

果実にはふたがついていて（蓋果）、ふたの部分がとれると種子が現れ、濡れるとねばねばして、動物などにくっついて運ばれます。





● カラムシの昆虫

見沼代用水路沿いの斜面に、カラムシがたくさん生えています。

カラムシの葉は食べられて、ほとんどぼろぼろです。食べた犯人を捜してみましょう。

フクラスズメ（チョウ目ヤガ科）の幼虫の鮮やかな姿が目につきます。

フクラスズメよりも小さな幼虫がいました。こちらはクロキシタアツバ（チョウ目ヤガ科）です。

フクラスズメの幼虫は、危険を察知すると独特の激しい首振りダンスをします。

このあと 10 月中に蛹化し、成虫になります。成虫は家屋の軒下や木の洞などでじっとして越冬します。



フクラスズメ幼虫



参考：フクラスズメ成虫



クロキシタバ幼虫

見沼自然公園を抜けると、見沼田んぼが広がります。名前は田んぼですが、稲田のほかにも野菜畑や苗木圃など、さまざまな作物が育てられています。

田んぼの稲刈りは終わっていましたが、典型的な秋の田園風景でした。



● イナゴの観察

稲刈りは終わりましたが、畔にはイナゴがいます。コバネイナゴですね。

見沼田んぼなどの平地の水田や湿地では、普通、このコバネイナゴが見られます。

コバネイナゴは翅が短く、全体がずんぐりとした体形です。

前翅の先は、後脚の腿節の先端（ヒトの膝に相当）と同じかやや短い位置になります。



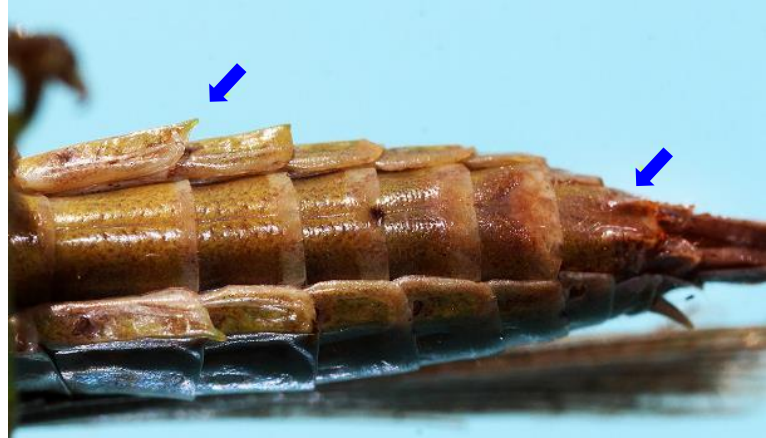
コバネイナゴ。翅は後脚の膝の位置と同じか短い



ハネナガイナゴの雌と雄。翅は膝の位置より長い



ハネナガイナゴの雌



雌の第 3 腹節の小突起と腹端の 1 対の隆起線（ 印）がポイント

コバネイナゴとハネナガイナゴを比較してみましょう。

ハネナガイナゴは見沼田んぼのようなところではめったに見られませんが、今日は飯島先生に茨城のご自宅の田んぼで捕まえてきてもらいました。

ハネナガイナゴはコバネイナゴと同様にバッタ目バッタ科イナゴ属で、丘陵地や谷地田や湿地で見られます。

ハネナガイナゴは体形はやや細め、複眼はやや大形、前翅端は膝の位置を大きく越えます（6mm 前後長い）。腹端は伸び縮みするので膝の方が比較しやすいですね。

さらに雌の第 3 腹節の後端の小突起と、腹端に 1 対の隆起線があるのが特徴です。

● 田んぼと周辺の植物観察

稲刈りの済んだばかりの水田です。

この田んぼは農薬散布や除草作業をほとんど行わないようで、普通の水田では見られない植物もあります。田んぼの周りや農道沿いでもいろいろなものが見られます。

雑草の観察にはとてもよい環境ですね。

＜コナギ＞

(ミズアオイ科ミズアオイ属)

一年草で、水田雑草で問題となっています。鮮やかな青紫色の花をつけています。花は早朝に開くようで、昼ごろには閉じていました。

葉はハート形や細長い円形で光沢があります。



＜イボクサ＞

(ツユクサ科イボクサ属)

一年草で、水田やあぜ道で見られます。3 個の薄紫色の花弁が目立ちます。ツユクサ科ですが、花の形や色は、青紫色のツユクサとはかなり異なります。



＜ミゾソバ＞

(タデ科タデ属)

水路の周辺や休耕田などの湿地に多い一年草です。

花弁はなく、がくが 5 個。先のほうが淡いピンク色です。やはり昼ごろにはほとんど花を閉じてしまいます。

葉は牛の顔のような形で、別名ウシノヒタイと言われます。



＜アメリカセンダングサ＞

(キク科センダングサ属)

無農薬栽培の水田やその周辺などでよく見られる一年草です。水田内では草高が高いため目立ちます。茎の色が暗紫色で遠くからでも見分けられます。頭花のまわりに長い総苞片がついています。



＜コセンダングサ＞

(キク科センダングサ属)

あぜ道や道路沿いなどに多く見られ、水田には侵入しないようです。茎も含めて植物全体が緑色です。総苞片は短く目立ちません。頭花には、普通、舌状花はなく、筒状花のみです。



果実（そう果）の比較

上：
アメリカセンダングサの果実
扁平で先端のとげは 2 個

下：
コセンダングサの果実
棍棒形で先端のとげは 2～4 個



＜マルバハコウ＞

(ヒルガオ科サツマイモ属)

観賞用に移入したものが野生化したといわれています。道ばたや畑地などで見られます。花冠は赤色から黄色の 5 角形で、草やぶでもよく目立ちます。



＜ヤブツルアズキ＞（マメ科ササゲ属）

栽培されているアズキの野生型とされています。花は黄色の蝶形花ですが、花弁がねじれて複雑な形です。果実（豆果）は線形です。葉は小葉 3 枚の複葉で、小葉は 3 浅裂しています。



＜クワイ＞（オモダカ科オモダカ属）

見沼田んぼの水田では、所どころでクワイが栽培されています。埼玉県は全国 2 位のクワイの産地なのだそうです。

クワイは多年草の水田雑草であるオモダカの栽培品種で、地下部にはオモダカより大きな塊茎をつけます。その塊茎から芽が出るのが“おめでたい”ということで、おせち料理につかわれます。



クワイの栽培（7 月初めに撮影）



花期のクワイ（9 月半ばに撮影）

田んぼではイネと一緒にクワイを栽培しているので、除草剤を使うことはできないのでしょう。おかげさまで雑草観察をたのしませてもらうことができました。

● スズメウリ

見沼自然公園内のそこかしこでスズメウリが観察できました。この日は花と若い果実が見られました。花は昼間に咲いて、雄花と雌花があり、それらは同じ株につきます（雌雄同株）。

果実は径 1cm ほどで、熟すと灰白色になり、中には扁平な種子が入っています。

名前からカラスウリと関係がありそうですが、スズメウリはウリ科スズメウリ属、カラスウリはウリ科カラスウリ属です。



スズメウリ。一年草、つる植物



スズメウリの葉と花



スズメウリの若い果実



観察会の最後に、見沼田んぼのボランティアガイドをつとめておられる I 藤さんに、見沼田んぼの概要をご紹介いただきました。

名産のクワイのことや、井澤弥惣兵衛が見沼代用水路を完成させ、新田開発を成功させたこと、そして公園内にある井澤弥惣兵衛為永翁の銅像製作にかかわる秘話など、興味深い内容でした。

I 藤さんは地元でガイドとして活動するうえで、自然や生物に関する視点を身につけるために、このミニ観察会に参加されたそうです。



公園内の井澤弥惣兵衛為永像

I 藤さんには、急なお願いにもかかわらず、快くガイドをお引き受けいただきました。ありがとうございました。

参加いただいたみなさん、平井一男先生、飯島和子先生、ありがとうございました。

たのしく充実した観察会でした。

レポートまとめ：大野透

クイズの答：種類としては 3 種です。種名は次のとおりです。

左の列の上から順に、ジャコウアゲハ雄、モンシロチョウ雄、モンキチョウ雄×2

右の列の上から順に、モンキチョウ雌×2、モンシロチョウ雌、ジャコウアゲハ雌